

## スクリーニングによる留学生の「心の健康」調査と フィードバック

中矢礼美  
(広島大学留学生センター 講師)

### はじめに

本稿は、2001年度に2回行った留学生満足調査の中でも、特に自由記述に対する対応に関する報告を行うことを目的とする。これはまた、自由記述に書かれている留学生が抱える問題、疑問等にかに回答するかという、「自由記述への対応モデル」を構築することも目指しており、今年度の取り組みと今後の課題を述べることとする。

そこでまず、自由記述に個別に対応していく際、何を目的として行うのか、また具体的に何を行うことを目的とするのかを定義しておく。まず、個別対応の目的は、「心の不健康」を訴える留学生の心を健康な状態に戻すことである。そのために具体的に行うことを簡単に述べると、①現実的な問題について情緒的な問題の解決、②その後に留学生が現実的な問題に取り組めるよう、有効な情報を提供することである。

なお、留学生の健康問題については、保健管理センターが管理するところであるが、今回のスクリーニングによって明らかになる「心の健康」については、その問題の所在は様々なところにある。そこで留学生センターがその健康状態と問題がどこにあるのかを診断し、どの部局がその処置に当たるべきかを判断し、その後に学内あるいは学外の最も適した部局が対応にあたるよう、あるいはネットワークを用いて対応するようコーディネートすることが重要であると考えられる。

### I. 対応プロセス

#### 1. 問題の緊急度の判断

心の健康の度合いは様々であり、それによって対応も異なってくる。本当に重い病気であり、緊急を要する場合は、保健管理センターの専門カウンセリングの方にお問い合わせするつもりだったが、今回については、そのような状況の留学生はいないと判断した。

#### 2. 問題の分類、問題別対応部局および対応策とその改善の呼びかけ

(補記表7,表8 問題別対応表参照)

まず自由記述すべてを詳細に分析し、それぞれの留学生が抱える問題を簡単なフレーズに置き

換え、問題リストを作成した。例えば、「①現在は修士論文を書くため、調査が必要です。対象は大学生なのですが、みんな協力してくれるかどうか自信がない。どうすればいいかご意見が聞きたい。②日本での留学生生活は来年3月までで、それから留学したいので、留学先出身の学生とか紹介してもらいたい。」という自由記述には、「研究」・「友人」・「言語・研究の支援」という3つの問題が存在する。すべての留学生の自由記述に同様の作業を行い、リストを作成した。

次にこれらの問題に対応するため、以下の手順をとった。

- ①留学生の抱える問題の所在がどこにあるのかを検討し、どの部局が対応すべきなのかを検討した。
- ②問題別ごとに各部局はどのような対応策を打ち出すべきかを検討した。
- ③大学が改善すべき問題について、以下のような対応を行った。
  - 大学が改善すべき点については留学生センター長より関連委員会へ提言を行った。
  - 問題に直接関連する学生課、就職課、留学生課に、問題の所在について説明をお願いし、また今後の改善策と留学生への回答内容について相談した。
  - 調査結果を、各部局長、関係教官（専門教育教官等）及び事務局（留学生担当係）に配布した。
  - 留学生センター指導部門のホームページに主な問題に対する回答と問題解決のための情報を掲載した。（補記の資料を参照のこと）

### 3. 問題別の個別対応内容の決定と対応

自由記述は、それぞれが抱える問題に対して留学生センターから何らかの対応を希望する場合には、名前と連絡先を記入してもらっていた。前期30名、後期30名がその対応を希望して、連絡先等を記入していた。そこで、それらの留学生に公平・公正に対応するため、問題別に大まかな対応内容を決定した。対応を求めていた留学生の問題は、以下の4点に大きく分類される。

- a. 大学の施設・整備、カリキュラム、研究指導の問題
- b. 経済的問題奨学金・授業料
- c. 人間関係の問題
- d. 日本語の問題

以下に、問題別の対応内容をあげる。

#### a 大学の施設・整備、カリキュラム、研究指導の問題の場合

- ・問題の所在の説明
- ・問題改善にむけての留学生センターの取り組みについての経過報告（指導教官には、学生からの要望がない限り、直接コンタクトは取らない。）
- ・問題改善に役立つ情報提供

- ・励まし
- ・内容に応じて研究室への来室のお願い

## b 経済的問題、奨学金・授業料の問題

- ・問題の所在の説明（自己責任問題と現行システムの説明）
- ・問題改善にむけてのセンター・各部局の取り組みの経過報告
- ・問題解決に役立つ情報提供（および情報の探し方）
- ・励まし
- ・研究室への来室のお願い

## c 人間関係の問題

- ・問題の所在の説明
- ・問題改善にむけてのアドバイスや情報提供、あるいは対応についての経過報告
- ・励まし
- ・研究室への来室のお願い

## d 日本語能力の問題の場合

- ・問題の所在の説明
- ・問題改善にむけてのアドバイスや情報提供、あるいは会話パートナーのマッチング
- ・励まし

## II. 対応方法

上記の対応は、メール、電話、手紙を用いて行い、それだけで終わった場合、研究室に来室してもらって行った場合と様々であった。

この時、対応方法のよりどころとしたのは、論理療法（RET）である。

### 1. 論理療法（RET）の適用

論理療法とは、アルバート・エリス(Albert Ellis)によって考案された、認知行動療法の特殊な形態である。論理療法が基礎を置いている見解は、人間には非合理的に考え行動しがちな生来の傾向があるように思えるということである。そして、問題に前向きに取り組むために、①自分の人生のある状況（A）に対する自分の感じ方（C）を理解し、この感情を生み出している自分の考え方（B）を修正することを目指している。

これを留学生に当てはめて考え、まず情動的な問題解決を行い。そして現時的な問題に取り組む援助を行うのである。

①留学生が持つ非合理的な考え、例えば、「日本政府あるいは日本の大学は、入学を認めた限りは、私にあらゆる面で快適な環境を提供するべきである」という非合理的な考えをもつ傾向があるために、②留学生は十分な奨学金を得られず、経済的に苦しく、アルバイトをしなければならない状況に対して、③非常に強い不満を感じ、他のさして研究ができない留学生の裕福な状況を知って不公平感を強く抱いている現状をまず理解させる。そして、この非合理的な考え方を修正するよう助言を与える。例えば、①「大学はあなたの入学を認めたが、必ず経済的な安定を約束はしていない。」②「アルバイトが苦しくても、日本で勉強をするという当初の目的は達成しているわけで、あと数年続けられないほどではない。」③「他の留学生は奨学金を得ているが、それらの人があなたより研究が劣っているなど、証明できるものはないし、あなたが証明することでもない。あなたの研究が誰よりも優れており、奨学金を得られるように努力するしかない。」「また、奨学金が得られなくて、苦しい状況であっても、勉強を続けられるのである。」

このように、考え方を修正し、前向きに、積極的に現在の問題に立ち向かって、目標を達成できるよう、現時的な問題に取り組む援助をする。例えば、少しでも勉強の時間がとれるよう、より大学に近く、効率よく収入を得られるバイトを探したり、金額は多くなくても可能性の高い奨学金に応募するよう助言する。その際、幾つかの解決方法と様々な情報を提供し、さらに今後自分でも問題解決にあたれるよう、情報収集の方法を提示するようにする。

### Ⅲ. 効果

#### 1. 留学生の反応

メールに対する返答は、第1回目の調査では多く、第2回目の調査では少なめであった。返答には、最初は私の説明に対して反論したり、反発するものもあったが、それに対する分析とアドバイスを繰り返した後は、問題そのものが未だ解決に至らない場合でも、感謝、自戒、一応の納得などを意志表明してくれている。

#### 2. 問題の改善度

では、自由記述に書かれた問題は、それぞれどの程度解決したのか、あるいはしていないのかについて報告する。

##### a. 大学の施設・整備、カリキュラム、研究指導の問題

直接的に大学が直ちに改善できることは少ない。

学生部就職課は、早急に改善に向けてアルバイトの情報提供方法を改善。(一般のアルバイト募集の用紙に、留学生欄を設け、可か不可かを提示するようになった。)

##### b. 経済的問題奨学金・授業料

全留学生が経済的に満足の行く状況になるのは不可能。奨学金・授業料免除の選抜に関する情報公開の問題も、「他大学も非公開」という理由と「公開にしたところで、不満はさらに募るのみ」という理由から今のところ実現不可能。

### c. 人間関係の問題

改善に向けての意向は聞いても、その解決は、その後の本人の努力によるところが大きく、改善済みかどうかは不明。

### d. 日本語の問題

広島大学国際交流ボランティア（現在 380 名登録）に呼びかけ、マッチングすることで一応の問題解決。

おわりに

はじめての自由記述に対するフィードバックであり、試行錯誤であったが、その意義はなんだったのか、そしてどのような限界が存在するのか、今後の課題は何かについて、以下述べてみたい。

#### 1. 意義

○約 800 名のうち、前期 30 名、後期 30 名の留学生には、留学生センターが何らかの形で支援しようとしていることを知ってもらうことができた。

○やり取りをする中で、核心的な相談をはじめ、対応することができた。初回の相談は、核心的な問題でない場合もあるため、きっかけを作り、本当の問題を聞き出し対応できたのは非常によかった。

#### 2. 限界

○返答のない留学生に対しては、問題が解決したかどうかを見届けられない。反発や対応に対する落胆から返答しない留学生もいよう。それらの人々に対しては、「去るものは追わず」という方針でいったが、果たしてそれでよかったのか。

○政策、規則、システムの問題、指導教官の問題などの解決は難しい。「詳細な大学のアクション・プランを立てるべき」というコメントを関係者から頂いたが、それは不可能である。しかし、ただはじめから「不可能」という態度ではなく、難しいがいずれ改善できる可能性のある問題は、各方面に問題があることをアピールしていき、留学生にも問題解決へむけてセンターが取り組んでいることを説明することは必要である。

#### 3. 課題

○留学生が陥りがちな非合理的ビリーフと適切な論駁法を蓄積していき、より効果的な対応をしていけるようにする。

○留学生センターが解決できる問題への取り組み。(情報提供の改善、ボランティアの拡充)

○学内外との連携による留学生の抱える問題解決への取り組み。(各部局へのお願い、指導教官に対するFD、パンフレットの配布等)

以上、2001年度留学生満足度調査のフィードバックについて報告をした。上述した課題を一つ一つこなし、来年度はさらに効果的な留学生支援ができるように努めていきたい。

#### <参考文献>

○アルバート・エリス(著)、國分康孝・石隅利紀・國分久子(訳)『どんなことがあっても自分をみじめにしないためには 論理療法のすすめ』川島書店、1996年。

○スティーブン・R・コヴィー(著)、ジェームス・スキナー・川西茂(訳)『7つの習慣』キングベアー出版、1996年。

○ゲーリー・アルセン(著)、服部まこと・三宅政子(監訳)、『留学生アドバイザーという仕事』東海大学出版会、1999年。

○コリン・フェルサム&ウインディ・ドライデン(著)、北原歌子(監訳)・国際カウンセリング協会、『カウンセリング辞典』、ブレーン出版、2000年。

○東山紘久『プロカウンセラーの聞く技術』創元社、2000年。